

マエと実像

お ね さん
お 嶺 雄
お 嶋 嶺
お 嶋 嶺
お 嶋 嶺

(東京外大助教授)



— まずはじめに廖承志訪日団の目的というものと、日本に与えた影響について、どうお考えですか。

廖訪日団の目的は

中嶋 廖承志訪日団について、現在の中国の政治情勢が決して単純ではないということもあって、非常に多目的な目的を持っていったように思うんです。

日ソ関係の牽制であるとか、在日中国人、つまり華僑に対する工作であるとか、日本の政財界に対する接近をこの際しておこうということがいわれるわけですが、私はそのような目的が政治目的だとすれば、中国自身にとってももう少し必要な目的がそこにあったのではないかと。

つまり日本というものはこの十年間ぐらいたいへんな変化と大きな経済成長をしているわけで、従来の日本軍国主義像一色の中国の日本認識というものと現実の日本との間には大きなギャップがある。そういうギャップについてはおそらく中国側もうすうす知っていたのだろう

けれども、実際に確かめてみたいという気持ちがあったと思うんです。俗にいえばディスカバー・ジャパン、そういう要案が非常に多かったと思います。

ただ廖承志訪日団の問題については、日本ではある意味では大騒ぎしたわけですが、肝心なことで伝えられてないことがあり、二つ大きな問題があります。

一つは広島にいていない。これはたいへん重要な問題だろうと思うんです。

全国六百六十カ所行っているのに、なぜ行かなかったのか、このナゾはすぐ解けるわけで、広島にいけば平和公園にもいかなければいけないだろうし、原爆資料館にもいかなければならない。そのときに、いま中国はどういう立場で問題を見ているか、あるいは表明せざるを得ないはめに落ち込むわけで、ご承知のように中国は依然として核開発に積極的であって近く核実験が再び行なわれるかもしれない。そういうときに日本の原爆に対する国民の感情というものもあるわけで、つまりこれは避ける必要があったと思うんです。

(この対談は、「中国核実験前記」行なわれました。編集者注)

中華人民共和国のタテ

— 中国の風土とこれからを考える —

これはかつて中国が、張香山もそうですけど、原水協大会に何回か来て、あるいはある意味では中国の方針を持ちこむことによって日本の平和運動に……

—— 日共と原水協の分裂を招きましてね。

中嶋　しかも、あれほど広島、広島といっていた中国が、本来ならば先に広島にくべきであるけれども、それができなかった。しなかったということ。しかもこのことは非常に大事な問題であるにもかかわらず新聞は一切報道しなかった。

—— そうでございましたねえ。

中嶋　それにもう一つ、これもせんさく好きなマスコミも週刊誌も気づいてないことなんですけれども、ホテル・ニューオータニに陣どつてあれほど各界と交流し、レセプションには何千人もの政財界のお歴々が訪れたにもかかわらず、美濃部知事と会っていない。あるいは美濃部さんも会おうとしなかったということ。これも非常に重要な問題だろうと思うんです。それにね、京都の蛸川さんはやはり会わなかった。この原因ははっきりし

ていますね。

(蛸川氏が、中国と仲の悪い日共寄りのため一編集部注)

脱文革は進む

—— そこで、劉少奇路線のときナンバーツーだったといわれる鄧小平が復活し、文化大革命のときに批判されていた人たちがどんどん復活してきている今日、文化大革命そのものはたして何だったのかについて……。

中嶋　これは一貫して私いつてきたんですけども、文化大革命というのは党内闘争であるということにははっきりしております。しかも重要なことは、毛沢東が少数派であったということです。

むしろそういう状況の中で毛沢東自身、権力の奪回をはかるには党の中では孤立していて、いわば党外の力に頼らざるを得なかった。

それが紅衛兵運動に頼り、やがて人民解放軍に頼ったわけですけれども、しかしながらいわばそういう造反ですから限定があるわけでして、ひとたび奪権闘争に成功したあとは、永遠の造反が繰り返されることはすでに勝利した者にとって

非常にまずいわけで、それを押えなければいけない。そこで紅衛兵運動を押え、やがて軍が文革の功績に頼って大きな力を占めてきたことを切らざるを得なかった。まあ林彪事件の大きな背景はそこにあるわけですが、こういうふうを考える、今日では中国ではもう文化大革命は終わったという認識が主流を占めてるんです。

最近の中国の論調を見ますと、「毛主席がみずから発動し、指導した文化大革命および批修整風運動」という——しかも当面はその批修整風運動が重要なんだと。「および」ということをあえて入れているということは、現在の闘争は文化大革命とは区別されたものであるということをも中国自身が認めているということなんです。しかも区別された批修整風運動の中で批修が第一で整風が第二である。

つまり批修とは何か。つまり林彪のようないは林彪とはいいませんけど、劉少奇のたぐいのベテラン師、つまり林彪を、あるいはその残滓をやつつけるということ。

こう考えますと、林彪事件はもうすでに過去になったはずのいわば予防クーデターだったと思う。林彪がこの世にいないにもかかわらずそれを依然としていうところに、今日の中国の中にまだまだ問題があるということであって、しかもそれは文革的な論理ではなくて、ますます脱文革、非文革、文革否定ということに対する抵抗、これとの闘争だということふうに考えていいと思います。

ですから旧幹部が次々復権してきているんですが、これはどうしても周恩来の問題に結びついて考えざるを得ないんです。どうも周恩来というのは、はじめから文革に対して本気でこれが長続きするとも思っていないかったし、いわば毛沢東型革命のリスクあるいはロスというものを常に尻ぬぐいしてきたのは周恩来であって、むしろ周恩来のほうが長い展望を持っておいて、毛沢東のドラマ——たいへん熱狂的なドラマだけでも、周恩来の非常に遠大な戦略的構想からすれば、永遠の革命だといわれた文革が、皮肉にも周恩来の長い構想の中で逆にドラマの二コ

マであって、やはり文革路線ではだめなんだということを対内的にも対外的にもこれではだめなんだということを周恩来は知ってるがゆえに、この中国の展開があったんだと。

すでにそれは六九年の後半あたりから出ていたわけで、これが対外的には米中接近に結びつき、日中復交に結びついて、対内的には脱文革。私はこれを毛沢東体制下における非毛沢東化——毛沢東体制下の非毛沢東化といっているんですけれども……。

だから日本にきた廖承志代表団も文革のことにはほとんど触れませんでしたね。

——きくところによると、記者クラブでの質問事項の中に入っていたそうなんです、答えなかったそうですね。

それから、一時中国から日本軍国主義の復活だと批判され、映画まで批判されるという状況があつて、そののちに「紅旗」なんかによると、日本の経済を学べないけど日本の経済の紹介なども行なうようになった。そして今回の廖承志

訪日団が政財界人、特に財界人にも会っている。そこで中国の対日戦略というのは、中国の国内情勢とかかわり合いをもつてどういふふうに変わってきたのかということに……。

国交を中国が望んでいた

中嶋 中国の対日政策が非常に変わったのは、すでに日中復交以前から、具体的には昨年の一月はじめごろから変わってきたんです。だいたい「日本軍国主義」ということがほとんどなくなってきました。日米安保に対する批判がなくなってきました。これはいろんなファクターが考えられると思いますけれども、私は、一つには中ソ関係だと思えます。

中ソ関係が非常に深刻になつてきていて、いまの中国としては第一の敵はソ連である。対ソ軍事戦略のうえから日本経済力を中国は注目せざるを得ない。あるいは逆に日本自身がこのまま放っておけば日ソ友好が進んで、友好というか平和条約とかチエニ油田、シベリヤ開墾という形で日本の財界がソ連と結ぶん

ではないかという懸念、これが非常に強かったわけで、それだけに中国としてはむしろ日本の政財界に接近してそういう日ソ接近をチェックするという大きな目的があったと思うんです。

これが日中復交の背景にあっただけに、ある意味で田中内閣は非常にラッキーに、スムーズに日中復交ができた。これは田中内閣の功績ではなくて、あの時点ではだれがやっても国交回復できたようない……。

—— 逆にいえば福田さんでもできたという。

中嶋 そういうことですね。

第二には、中国自身、文化大革命の挫折に気づき、国内経済は非常に行き詰まりました。農業を見ても対前年比減産というのが現在の状況でして、いまの中国で、一方で人民は節約せよ、食を一口、二口、あるいは三口減らせというのがスローガンになってますでしょう。あるいは「広く食糧を備蓄し」これは一方では対ソ戦略に備えた食糧備蓄もあるけれども、そういう経済の不振に対する中国の

さし迫った呼びかけであつて——。

そうしますと革命、革命ということだけで生産を放つぱり出すようなああいうやり方というのはいかに中国の経済にマインナスを与えるか。これではだめなんので、ましてや今後中国自身が、世界に、檜舞台に活躍するということは、同時に世界が中国の門戸を開こうとするわけであつて、そういういわば外圧に耐えていかなければいけない。

中国自身をかためなければ、中国にとつても国際化時代に乗り切ることができないであろうという認識があればこそ、その点でも本格的な経済建設に着手せざるを得ないわけで、そのことが日本の技術、プラントというものに当面必要するということだろうと思えます。

この両面が相まって考えますと、いつまでも日本軍国主義批判といっているよりも、まさにある意味で中国にとっては虚であつて、日本がまさか攻めてくるというふうな考えてないわけですし、日本が中国と比べて軍事力は全然問題にならないわけですから。

にもかかわらず文革の当時はそれが必要だったんですけども、いまリアルに考えてみるとそうではなくて、むしろ日本の財界なら財界、接触することによってできるだけプラントなりノーハウを得たい。それが財界の中でも特に三菱との接触を求めているということ。つまり三菱グループというのはいわずと知れた日本のある意味での軍需産業であるわけで中国はその三菱こそ日本の軍国主義の黒い企業、死の商人とさかんに批判していた。それにもかかわらず三菱と優先して接触しているんです。

それから第二の、そういう状況の中でイデオロギーというものと、そういう現実外交、あるいは非常に打算的な国家利益の外交をどういうふうに調和させていくかということですけども、これは、まさにそういう現実外交なり国家外交、あるいは政財界との結びつきを進めていけばいくほど、それに対する理由づけが必要になってくる。

それがまさにソ連こそ——社会帝国主義こそ最大の敵であって、いまや中国は

社会帝国主義の侵略の脅威に直面しているという、これはある意味でイデオロギーです、ね、そういうものが必要になってくるわけです。

—— かりにそれがフィクションであつても必要であるということですね。

中嶋 ええ、必要になってくる。

ですから周恩来時代になれば、現実路線だからソ連ともうまくいくのではないか。あるいは日本共産党ともよりを戻すのではないかという非常に皮相な見方であつて、そういうふうになればなるほど、つまり現実路線が進み日本の政府や財界との接触を深めれば深めるほど、一方には中国にとつてもイデオロギー的な戦略目標が必要になり敵が必要になってくるわけで、それは明らかに最近の状況が示していると思います。

こういうふうになってきますと、具体的には周辺諸国なり、ついこの間までは民族解放闘争——反米、反帝の民族解放闘争こそ世界革命の拠点であり、現在の一番大きな課題であつたということに鼓吹された革命勢力、こういう政策はどう

なるかという、これは具体的にもうはつきり出ているわけですけど、中国はこういう革命勢力に対してつれなくなっている。

現に東南アジア周辺諸国に対する援助、これ武器援助をふくめてあつたわけです。文革のときには、中国のトレードマークをつけた武器を援助せよ、中国は世界革命の兵器庫にならなければいけない、というのがスローガンでしたから、そういうところに対して援助もかなりストップしております。フィリピンの新人民軍に対して非常につれなくなっているとか、そういう変化があるわけです。

—— バングラデシュも応援しなかつたですからね。

中嶋 それからメキシコの大統領がこの間訪問しましたでしょう。そのメキシコとの共同声明を見ますと、中国は外国勢力による暴力的な政権の転覆に反対である——外国の干渉に反対であるということも書いてあるわけです。これは従来の中国のラテン・アメリカ政策、あるいはアジア・アフリカ政策とはずいぶん違うわ

けです。そういう一方に矛盾が出ているだけにますますソ連というものを悪玉にせざるを得ないということがいえると思えます。

じゃ、何も中国自身が、フィクションとしてそうせざるを得ないのかという面がありますけども、一方、単にこれはフィクションでないのは、ソ連自身もものすごいゴリゴリのブレジネフ現実主義によって中国封じ込め政策を著々進めているということにも関係しますね。

国共合作はあるか

——もう一つお聞きしたいことは、私の知っているある先生が国共合作があるんじゃないかという大胆な仮説を立てたわけです。

その方のおっしゃるには、マカオにいったら中国人居留地が、五年前においては大陸系と台湾系と分かれていがみ合っていた。それが今度いってみたら仲がいい。表面的には批判し合っているも非常に落ちついた感じになっていた。

二つ目には、台湾内部のゴリゴリの大

陸反抗派というものが、地位が低下してきている。現実主義者のなグループが、台湾内部において蔣経国をはじめとして力を持ってきている。

三つ目は、どう考えても米中接近を成し遂げられたということ、米国と台湾との間に一種の合意があったのではないかと、秘密の話し合いが何かあったのではないかとということから、国共合作という意味での、従来のな国共合作ではなくて非常にゆるい形においての大陸中国が台湾省に相当大きな自治権、いままでの国家の中の枠では、一つの国家の中にそれだけ自治権を与える例がなかったと思われるぐらいな大きな自治権を与えたいという一つの中国への統一がなされるんじゃないかという大胆な仮説なんです。

中嶋 原則的にはそういう見方ができると思うんです。これは中国人ですから、五年、十年、あるいは二十年、三十年のレベルで問題を考えないわけでは、そうしますと国共合作というのは最終的にはあると考えていいんですが、ただ、そういう場合には、「国共」という区別その

ものにあまり意味がなくなるような状態においてだろうという気がするんです。

というのはいまの毛沢東主義なり毛沢東思想というものも、まだまだどうなるかわかりません。しかもいままでの歴史が証明しているように、現在の中国自身が、もう一度変化するということのほうが蓋然性があるわけです。

ましては毛沢東というああいいう巨大な指導者がいなくなったあとに変化するという可能性があるし、一方蔣介石も毛沢東とその点で同じような立場にあるわけで、台湾自身も変化するとということになると思います。

しかも中国人というのは非常に表と裏があるわけでは、表向き強いことをいっているときは実はなかなか困っているときなのであって、表向き柔軟な姿勢をとるときは別の戦略を立てているときであって、しかもそういう中国的な発想なり体質からしますと、当然なかの接触なりそういうものは一方であると見ていいわけでは表にあらわれた顕教と密教というものがあるわけですよ、ミックスされ

て。その顯教的レベルだけで問題を考へてはいけないわけで、まさに密教の部分が大変なわけです。

そういう前提に立ちますと、やっぱりこの問題の解決は、中国人自身がつくった問題ですから、中国人自身の問題として解決されていくであらう。

ただ私は、近い将来実現するかというと、どうもそれはむずかしいような気がします。少なくとも毛沢東、蔣介石亡きあとということはいえると思います。毛・蔣両首脳が現存している状況の中でドラスティックな変化はほとんど無理だと思えますし……。

それからいまの三つのお話ですけど、マカオの場合はちょっと特殊なんですよ。ご承知のように、マカオというのは一九六七年にたいへんな暴動が起こりまして、あのときにポルトガルは完全に北京に屈服したわけです。それであそこから台湾系の特務なども一切追放されました。そういう状況の中で毛沢東思想一色になっちゃったわけです、表面では。

ですから国民党系の人たちというのは

信条的に国民党に傾斜していても毛沢東のハタを掲げる以外になくなりまして、これはポルトガルとすればマカオでトラブルを起こしたくない、いわばやがて消えていく運命にあるところですから、ポルトガルの植民地としてはなくなっていく運命にあるところですし、中国大陸とも陸続き——半島ですけども統いてますから。

しかしながら同時に、実際に私は体験しましたが、マカオは——これまた中国人的ですけども、毛沢東語録の中にアヘンを隠して、つまり毛沢東語録を掲げながら、毛主席、毛主席といっているが、一方ではその間にアヘンがはさまっているという状況もありますね。

それから最近でもあそこでカジノがますます盛んになりました、ラスベガスに見られるような大きなカジノができてきているわけですね。

つい最近の例ですけれども、マカオの労働組合・検工会のリーダーはマカオの一番の実力者です。しかしながら彼らは、こういうこといいいかどうか知

らないけれども、奥さんを何人も持って……（笑）これは南賢という指導者は、この間も賭博場で日本円で千五百万円もすったということ。これがいれば表向きは毛沢東主義を掲げている労働組合の指導者なんです。そういう現状があるので、ちょっとマカオの場合は必ずしもそういうったあれではないと思えますね。

二番目の台湾自身の変化、これは一方であると思う。しかしながら私は、むしろその可能性よりも、今後ソ連や東欧諸国との関係の改善という方向が先に出るのじゃないかという気がします。それによって台湾のインテグレイティーというか統一を保つということであって、いまの中国と台湾とはは生活水準も国民所得もイデオロギー、考え方すべて違うわけですから、これが一緒になるということはあり得ない。

あり得るとすればさっきおっしゃったような非常に広範な自治なんでしょうけれども、それももつと先の課題じゃないかという気がしますね。そういうことを実はアメリカは知っている。

中国自身もいま盛んに台湾解放、解放といっているのは、そう簡単に台湾は解放できないということを、軍事的に無理ですし、平和解放としても台湾の中で民衆がほんとに賛成すればですけども、どうもそうでもない。むしろ台湾の人たちは台湾の人として生きていきたい、自分たちは台湾に生まれ育ったんだという、いわば新しい台湾人としての意識が強い。

——台湾独立……？。

中嶋 独立というのはちよつとあれですけども、かつての外省人と本省人の対立ということではなくて、むしろ全然大陸を知らない若い世代は人口の七、八〇％になっておりますから、こういう人たちが台湾としての意識をだんだん持ちはじめているわけで、彼らは決して毛沢東を選んでいるわけではない。あるいは蔣介石に批判や不満があっても毛沢東を選ばないというのも現実です。

ですから台湾の中で革命でも起こらない限り、当面すぐに一緒になるということとは不可能である。そういうことを知っ

ているからこそ中国は逆に台湾解放ということを盛んに唱え、それによって心理的な作戦を行なっているのが現状だと。

ですから実際には米中コミュニケーションにもあらわれたように、台湾問題というのはますます現状維持という合意があるんです。こういう合意があればこそアメリカは一方で北京と交渉しながら、他方では台湾に最近ものすごく経済進出しているでしょう。日本が引き揚げたかわりに自動車でもアメリカは肩がわりしている。銀行もそうです。そういう形でやっているわけでして——台湾に対する組織投資、ものすごく活発になってますから、そういうことだというふうに考えていいんじゃないでしょうかね。

経済は伸びなやみ

——次に中国自身の経済問題についてお聞きしたいんですが……。

中嶋 私、経済の専門ではないんですけども、ただ現在の中国の経済の実態については、ご承知のとおり全然数字がなく、個別的な情報がありますけど、で、第四

次五年計画に入っているはずですけども、その総枠もわかりませんし、これは近代国家にないことですね。だいたい中国人民代表大会が八年半にわたって開かれないうわけですから、国家予算がどうなっているのかさっぱりわからない。

あるいはそういうものは欠落したまま行なわれているわけで、そういう意味からすると、数字の上をとってみると中国の経済は依然として停滞しているわけで、一九五七年の大躍進政策がはじまる直前の段階が、それは六〇年代前半の経済調整政策で少しずつ上向いて、また文革でもって落ち込んで、ようやくそれが回復してきて、いま五七年ぐらゐの段階にきたというふうに端的に考えていいわけです。

それからこれは日本はタブーですからあまり報じられませんが、香港への難民が最近ますます増大しているという現実です。

中国は一枚岩か

——最後にお聞きしたいのは、外交、内

政をふくめまして中国の将来といったらおかしいんですけれども、これから毛沢東死後の問題もあるし、現実には中国そのものが、結局林彪を副主席に定めた綱領はまだ生きていますので、停止になつてはいるわけですが、それにかわるものができてないわけですよ。それからまだ八年間も人民大会がやられていないとか、一つの国家でありながら組織形態が完全にできてないという問題が一つと、二つ目は八対二でもとにかく批判がでてくる。その批判論文がまだある。

自由主義国家ならばそれも不思議ではないですけれど、いわゆる一枚岩的な国家ならばその批判的なものが表に出るんだけれどもある意味では驚きというか。

中嶋 ただ、中国の論文というのは、眼光紙背に徹してみないとなかなかわからぬような形をとっているわけでしょう。

毛沢東思想を掲げながら毛沢東を批判するとか、赤旗を掲げながら赤旗を叩くということですから、それはかつて文革の直前に北京の知識人たちがあれほどの状況の中で毛沢東批判をやっていたわけ

です。ですから。むしろそういうふうで考えていいわけだと思いますよ。

もう一つ、中国というのは決して一枚岩ではない。絶対に一枚岩ではあり得ない国家です。あり得ない社会です。非常に複雑多元社会であつて、いかにも毛沢東思想で統一ということがさげばれようとも、決して一枚岩になれないのが中国社会の特徴なんです。

それは具体的に多民族国家であるということもありますし、言語も違つたり、そういうことですか。

中嶋 それもありますが、むしろもっと根本的に、いわゆる面従腹背といわれるような国民の伝統、現在でも中国の指導者自身がそういう矛盾性を持っている国民性を知っていますよ。しかもこれはかなり根強いものでして、ある意味では政治とか国家というものに対する考え方がまるつきり違うんですね。つまりそういう意味で一枚岩になり得ないのが中国人でして、ある意味で政治というのはあまり信用してないです。

日本人はどぶ板から外交にいたるまですべて政治が解決するものだというふうで考える。政治に過大な期待がある。だからこそ政治批判がすぐ出てくる。中国人というのは、政治はこまめでしかやれないんだ、それはよくいわれる「帝力いずくんぞ我にあらんや」というのがあつた。つまり政治のなし得ることは神の世界のことであつてわれわれの生活にはかわりあがないという。

ということは政治のなし得る限界を逆知っているということであつて、それで満たされない部分は長い間の伝統的な相互扶助とか地縁、血縁の関係をとか、そういう共同体的な状況の中で国家を支え、民族を支えてきたわけで、それだけにやわらかい、根本的に。

同文同種の国というけれど

つまり日本と同文同種の国家だといいますが、日本の場合には逆にいえば今回の廖承志さんの訪日ときのマスコミの報道を見てもわかるとおり、一枚岩的になりやすい体質がありますね。

中嶋 それは日本という特徴もあるでしょ

うし、民族的な特徴もありますし、つまりすべてが黒か白かにならなければ気がすまないという国民性もあるしね。ですから軍国主義、戦前の皇国日本から急激に民主国家になるというような、そういうまったく同文同種でありながら対照的なんですね。そこを理解していかないといけないと思いますね。

—— ある意味では、ヨーロッパ的ですか—— というのとも違いますか。

中嶋 違いますね。それはまさに中国的ですね。だから、いくら論理のうえで毛沢東思想であつても、やっぱり私はこの特徴にはかてないんじゃないかという気がしますね。

それは、たとえば今日の中国はある意味ではものすごく民族主義でしょう。これはマルクス主義なり、万国の労働者団結しろ、あるいは勝利したプロレタリア國境にこだわるべきではないという、いわばインターナショナルリズムの概念からすれば相反するんですが、にもかかわらず実態としては強烈な民族主義を主張し

ているということは、つまり論理のうえではいくらそれをそうしようとしても、実態としてのナショナルリズムを持つている排他性なり非合理性というものにとらわれざるを得ない現実を示していると思うんですよ。

それはなぜかという、論理のうえでいろいろのことを整合させることは簡単だけでも、中国のナショナルリズムというのは、まさに土に対する愛着、それから血縁、地縁です。

これはいまでも華僑社会には生きていけるわけで、同族の人たちが集まって何かをすぐやる。それから血のつながりがなくとも、同じ李なら李、陳なら陳という名前だけで、陳宗姓会、李宗姓会というものをつくって、一種の相互扶助をやるわけですよ、冠婚葬祭からすべて。そういうところにもあらわれているし……。

—— 苗字の数は日本に比べて少ないわけですね、二百ぐらいで。

中嶋 そういものは郷土に対する愛着、郷土意識、それがやがて民族に対する一体感、それからやがて中華思想的なもの

に—— ナショナルリズムの極致であり毛沢東思想、世界を照らす、世界の民衆の心の中の解体は毛沢東思想であるとかいう形になるわけで、これを論理のうえで否定しようと思つても、つまりそういういわば密度の濃い、濃度の濃い社会的な、歴史的な背景を持つていただけに、どうしても中国というのはナショナルリズムにならざるを得ないわけです。

むしろそれをカムフラージュするためにはイデオロギーが使われているというのが中国の現実である。

そういう相手が一方にあり、一方ではスラブ民族があるし、そういうものは、この東南アジアに中ソ対立がますます出ている中で問題を考えていくとかなり複雑でもあるし、そう一筋なわけでは理解できないものがあると、いうふうに見ておく必要があるんじゃないでしょうか。

—— どうも長い時間ありがとうございました。

きき手・寺井 融

(編集部)

(6月9日収録
文責・編集部)

ギーの関係



お雄さん

(評論家)

はや速

みず水

し志

マルクス・レーニン主義の理想というものとソビエトの現実というものについて先生からいろいろお話を伺いたいんですが、昨年ソ連邦が結成されて五十周年ということで、マルクス・レーニン主義という角度からもう一度見直せるような時期にきているんじゃないかと思うわけです。

そこで、最初にイデオロギー的な問題について伺いたいんですが、特に自由という問題については、最近でいえばソルジェニツインとか、そういうインテリゲンチヤに対する、われわれから見れば弾圧とか言論統制とかいろいろなものがあるんじゃないかと思うんですが、でも、そういうのがロシア建設五十周年を経て、ある面ではかえって規制が強まっているんじゃないかというふうにもいわれているんですが、どうでしょうか。

志水 一言でいまして、つまりロシア人がこれまで自由というものをほんとうに享受したことがあるかどうかということなんですが、ぼくはないと思いますね。もちろん歴史上非常にわずかな間、ほ

んとうにつかの間ですが、自由を味わった時期というのは確かにあります。それは一九一七年の二月革命があつて、それから十月革命がありますね。その間に表現の自由というのが一挙に出てきたわけですね。政治的な自由はもちろんあらわれてきた。芸術運動でも新しい試みがなされた。これはほんとに革命が解放したエネルギーだったとぼくは思うんです。

ところが、そこがぼくはロシア人のロシア人たるゆえんだと思いますけど、その自由というのは、どうもアナキーへ傾斜しやすいですね。

十月革命が終わってから労働者による工場管理というものが盛んに行なわれたわけです。もう革命はわれわれの革命なんだから、従来資本家を持っていた工場は今後はわれわれが管理する、われわれが経営するということでやりはじめたわけです。

ところがいざやってみますとやっぱりうまく工場を管理することができないんですよ。アナキーがそこに生じまして結局は工場全体を官僚主義的に再組織す